

かつて子供だったすべての大人に問う 「あなたが大人になったのはいつですか？」

北野小学校長 丹羽 郁人

かつて子供だったすべての大人に問う。
「あなたが大人になったのはいつですか？」
二十歳になった時？ 成人式を迎えた時？ 働き始めた時？
いや、そうかもしれない。でもね。

あの時かもしれない。
「歩くこと」がここからそこに行くという、ただそれだけのことになった時。

だって、子供のころ、道は冒険だったじゃないか。
道はたに坂があれば坂を上り、溝があればぎりぎりを歩いた。
石ころがあれば思わず蹴り上げた。
シロツメグサを見つけたら「四葉のクローバー」を探した。
スズメはさえずり、蝶は舞った。
入道雲は背中を押してくれたし、夕陽は励ましてくれくれた。
でも、いつのころか「歩くこと」は、
目的地へたどり着くための、一つの手段になった。
「大人」になったのだ。

あの時かもしれない。
「なぜ」なんてことを考えなくなった時。
だって、あのころ「なぜ」って考えるほうが
謎とスリルがいっぱいだったじゃないか。
ぞくぞくするような、わくわくするような「？」が、
いっぱい、いっぱいあったじゃないか。
でも、いつのころからだろうか。
「考えたって無駄さ。そうなっているんだ。」と思うほうが楽になったのは。
「大人」になったのだ。

私たち教職員は学校に通っています。
ひよつとしたら「学校」に、
あの日なくした何か大切な忘れ物を取りに来たのかもしれない。
そして、それは「物」ではなく、
たぶん、あのころの「自分」なのかもしれません。
あのころの「自分」に、会いにきたんです。
教室には、
運動場には、
そして通学路には、
なまいきざりだった「僕」がいるんです。
泣き虫だけど強がっていた「私」がいるんです。
きつと、輝いていた、「僕」も「私」もいるんです。
あのころの「僕」に出会えたら、こう伝えたいな。
「大人になるってまんざらでもないぞ。
でも、子供って素敵なんだぞ。
とつてもとつても素敵なんだぞ。」

私たちは忘れているだけで、
私たちは「子供」だったのです、
誰一人例外なく。
「あなたが大人になったのはいつですか？」
そして、覚えていますか。
あのころの自分を……。」

(二〇二二・一一・二二)

